講道館柔道 十段物語

第１回
講道館最初の十段 山下義韶（よしつぐ）

本橋端奈子

嘉納師範との出会い

図１　晩年の山下義韶
（講道館柔道史料館）

山下義韶は慶応元（１８６５）年２月16日、[1]相模国足柄郡小田原に生まれた。父の山下勝五郎は小田原藩主大久保家の武術指南役であり、本来であれば山下もその跡を継ぎ、三代目指南役になる筈であった。しかしすぐに幕藩体制であった江戸時代が終焉を迎え小田原藩は無くなり、また若くして父・勝五郎が死去したこともあって、明治６（１８７３）年、９歳の山下は母と共に縁を頼って上京することとなる。

上京後は神田三崎町（現在の千代田区）に住み、明治10（１８７７）年13歳頃より、同じ町内にいた漢学者の平松直太郎などについて漢学を修行していた。ここで山下は、その平松宅に下宿していた１人の青年と出会う。その青年こそ、当時開成学校学生の嘉納治五郎師範であった。山下は、５歳年上であった嘉納師範と近所のよしみもあって仲良くなり、学問を教えてもらったり弟分のような立場で遊び相手になったりしていた。特に当時流行りであった野球に師範ものめりこんでおり、山下はキャッチボールの相手やノックの球拾いに走り回らされていたようである。当時は山下も相当にやんちゃで負けず嫌いの乱暴者で、よく師範に小言を喰らっていた、と後に自身で述懐している。またこの頃、天神真楊流柔術を学んでいた師範に連れられて福田道場に見学に行ったりもしている。しかし、熱心に道場に通う師範を見ても、自分も柔術をやってみようという気にはならずにいた。そんな中、師範と山下は共に二松学舎塾生となり漢学を学ぶ同門の間柄となったが、少しして明治13（１８８０）年16歳になった山下は、家庭の事情から大蔵省印刷局の技生となることが決まり、勉学と柔術修行に打ち込む師範とは少しずつではあるが疎遠になっていった。

印刷局において山下は、新たに製造事業に関する発明をして賞金をもらうなど優秀に活躍していたが、故あって３年ほどで印刷局を辞任することとなる。その後は簿記などを学

び、全く師範や柔道とは無縁の人生を歩んでいた。一方その頃の師範は、明治15（1882）年に講道館を創立し、人間形成教育の手段として「柔道」をひろめようと奮闘していた時期である。いまだごく小規模で費用も師範の持ち出しではあったが、講道館とともに嘉納塾という私塾も設置し、門下生も十数人集まってどうやら少しずつ恰好がつき始めていた。そしてちょうどその頃、偶々、数年ぶりに師範と山下は神保町の街中で再会を果したのであった。この再会をきっかけに、19歳の山下は柔道一路の人生を歩むこととなるのである。時は明治17（1884）年8月14日、講道館の入門者は山下で19人を数えていた。[2]

年1万本の猛稽古

講道館に山下より先に入門した18人は、富田常次郎や西郷四郎、湯浅竹次郎などいずれも講道館の礎を築いた猛者ばかりである。そんな彼らに稽古をつけられた山下は、徐々に生来の負けじ魂が発揮され、強くなりたいという気持ちが募るようになり、しゃにむに猛烈な修行にのめりこんでいった。当時について山下は次のように振り返っている。

私は年に一万本の稽古をしようと志したんですが、それにはどうも人が足らないので、とうとう残念ながら一度も達した事がありません。一番多かったのが、何でも九千六七百本もやった年でした。[3]

これは1日も休まず続けたとして換算しても、日に約30本という荒行である。それも相手は自分よりも強い猛者ぞろいという中であり、相当な体力と精神力が必要であったことは想像に難くない。元武術指南役の家柄という、持って生まれた資質もあったであろうか。しかし誰よりも強くなろうという虚仮の一心、そしてその為にはどんな努力も惜しまない山下の「鈍根」と表現される忍耐力によって、その頭角をすぐに現し、入門から僅か3ヵ月にして初段へと昇段することとなるのである。その後も、天性の才能と誰にも負けない努力を武器にめきめきと実力をつけ、明治18（1885）年6月には二段、すぐ3ヵ月後には三段、翌年5月には四段と、かなりのスピードで先輩たちを追い抜かしながら昇段していった。入門から2年、山下は四段になると同時に、九段坂上富士見町にある品川弥次郎邸に移ったばかりの講道館幹事に抜擢され、倍増していた入門者の取立てを一手に取り扱う大役を任されるまでになった。[4]この人事を見ても、山下が師範からの信頼が厚く、既に講道館の中心的人物となっていたことが窺えよう。

この年には、後に講道館柔道と古流柔術との直接対決と評される警視庁主催の武術大会が開催されている。新興の講道館が生き残りをかけて挑んだこの試合には、西郷四郎や横山作次郎と共に山下も出場して熱戦を繰り広げ、戸塚派揚心流に対して勝利をもぎ取るに至った。[5]この勝利によって、講道館柔道の名声は一気に高まり、明治22（1889）年警視庁の武術訓練に講道館柔道が正式採用されるきっかけとなったのである。その際に師範から指名され、柔道世話係として警視庁に赴いたのが山下であった。

また、同年2月には慶應義塾へ柔道教師として採用され、その後、麻布北新門前町（現在の港区）に中川将行海軍大尉が作った北辰館道場にも教頭として招かれている。この北辰館は450坪もの広さで山下の住まいも兼ねた、当時日本一の町道場であった。[6]三田（現在の港区）にある慶應義塾道場と北辰館は近かったため、塾生は広い北辰館で稽古をすることが多かったようである。[7]活法の指導をするときなどは山下の自宅の方も使い、また、よく塾生に御飯を振舞ったり一緒に酒を飲んで騒

いだり、かなり堅く篤い師弟関係を結んでいた。ある時などは塾生らが三田の料理屋で騒ぎすぎて喧嘩に至り、山下共々、福沢諭吉から苦言を呈されたこともあったほどである。[8]蛮勇とでもいうべき気風の柔道部生たちと素晴らしく密な師弟関係でいられたことは、山下の、技術だけでなく人柄が負うところも大きかったのではないであろうか。そして山下は、こうした柔道教師の功も買われて明治26（1893）年1月15日には五段に昇段する。

稽古を重ね、練達しつつあった山下の柔道の精妙さは、

右も利けば左も利く、業として可ならざるなき中でも、その足業に至っては眼も止まらぬ早業で、対手に立つもの、唯もう夢心地に投げらるる感じがした。[9]

と表現されている。また、この頃入門してきた磯貝一[10]は山下について

山下義韶・佐藤法賢は、講道館の典型的技士ともいうべき人で、横山作次郎・戸張瀧三郎と共に、講道館を代表して警視庁教師として庁員の指導に当っていた。特に山下さんは払腰・内股・体落に長じ（略）俗に「棒立ち」と云う一本の棒のようになって、体を捨てる倒れ方は、天下一品であった。[11]

と述べている。また、ある神社の奉納柔道試合に山下が飛び入り参加をした際、出てくる相手を次から次へとなぎ倒し投げ散らかし、賞品をもらって悠々と去ったのだが、この所業が「あまりに強すぎる、人間業じゃない」と論議になり、きっと天狗が飛び入りしたのだということで落着した逸話も残っている。[12]そしていつしか、山下義韶・富田常次郎・西郷四郎・横山作次郎の4人をして「講道館四天王」と言わしめるまでに実力をつけていたのであった。この様な、「鬼神のような」強さを誇った山下ではあったが、柔道と並行して嘉納塾において英語などの勉学も精力的に修めた。この嘉納塾で身につけた英語が、後に山下に新しい次元での活躍をもたらすこととなるのである。

アメリカでの柔道普及の魁として

明治31（1898）年正月の鏡開式において、横山作次郎とともに史上初の六段への昇段を許された山下には、予てよりひとつの目標があった。この、素晴らしい講道館柔道を世界に広めたいというそれである。[13]そしてその機会は、明治36（1903）年になって巡ってきたのであった。かつての慶應義塾柔道部の教え子でありアメリカ留学中の柴田一能（かずよし）二段が、「大北鉄道会社社長で鉄道王として名高いジェームス・ヒル氏の義息が、柔道教師を探している」と山下に打診してきたのである。まさに海外での柔道普及が宿願であった山下は、もちろんこれを快諾した。そして9月22日、講道館員や慶應義塾生らに盛大に見送られつつ、山下は筆子夫人を伴って横浜からシアトルに向けて出帆したのであった。[14]

シアトルで出迎えてくれたのは、ジェームス・ヒルの義息サミュエル・ヒルであった。彼が言うには、自分の息子に日本武術の強い精神を植え付けたいとのことで、まず早速、柔道披露の場を兼ねた実演会が催された。ここでの様子は次に詳しい。

（山下）氏はここぞとばかりに満身の勇を鼓し、その精錬した妙技を恣にしたのである。固より此の一挙が米人に日本柔道の趣味を感ぜしめたことは甚大であったに相違ない。『あのちっぽけな体で、あの大男を自由に投げ飛ばす不思議な技術…』こういう評判はもうここかしこに伝わった。[15]

噂には聞いていた日本の武術、小さい者が軽々と大きい者を投げ飛ばす魔術のような技をはじめて目の当たりにして、多くのアメリカ人

たちは驚嘆し、素直に喝采を送ったことに違いない。しかし悪いことに、この実演を見たヒルの夫人が柔道は危険である、息子に習わせるなんてとんでもない、と言い出してしまったのである。これにはヒルも閉口したが、結局ヒルの息子に柔道を教授するという話はたちまちの内に立ち消えになってしまった。山下としては、意気込んでアメリカに到着して数日の内に職を失ってしまい、大いに戸惑ったであろう。そんな山下を不憫に思ってか、ヒルはそれからというもの山下を各地に連れて行き、様々な場所で興行を打ってまわった。この興行は、講演や実技の他に時には無頼漢などとも立ち会って勝利を収めなければならないという、厳しいものではあったが、このお陰で柔道という不思議な武術が徐々にアメリカ人に知れ渡っていくことになる。そしてそういった興行の効果も出たのか、結局ヒルの計らいで、山下はヒルの母校であるハーバード大学において柔道を教えるという契約を取り付けるに至り、ようやくアメリカでの普及に光が見えてきたのであった。そんな中、先の南北戦争で活躍したリー将軍の孫娘や社交界で輝きを放っていたワーズワース夫人[16]などが、どこかで山下の噂を聞きつけ、入門したいと願い出てきた。山下もこれを許し、筆子夫人[17]にも彼女らの指導にあたらせたという。このように面白いことに、アメリカでの柔道普及は女性から始まったのであった。柔道の中の「護身術－self defense－」の面が海外でよくもてはやされたことにも関係があろうかと思われる。

ハーバード大学での柔道教授は、生徒も多く皆熱心であり、全てが段々と軌道に乗って半年が過ぎた明治37（１９０４）年春、山下は突然、ワーズワース婦人から「アメリカ大統領であるセオドア・ルーズベルトが柔道を稽古して欲しいとのこと」という手紙を受け取った。新しもの好きでスポーツマンである大統領の目に柔道がとまったのである。これには山下も吃驚したが、願ってもない機会であるのは確かである。そこで、ハーバード大学との契約半ばではあったが、大学の方は助手の日本人に任せ、勇んでホワイトハウスに乗り込んでいったのであった。

ホワイトハウスには時の公使館付き武官である竹下勇も同行した。竹下が同行者に選ばれたのは、彼にも柔道の心得があったことが関係していると思われる。ルーズベルトはとても気さくで、山下は初日の挨拶だけのつも

◉講道館柔道
ビデオシリーズ　第九作
古式の形
古式の形は、嘉納治五郎師範が講道館柔道を創始される以前に学ばれた柔術・起倒流の形です。古式の形は、往時の武士が戦場で甲冑を身に付けた組討の投技を主としたもので、表の形14本、裏の形7本から組み立てられています。
〈内　容〉
●嘉納治五郎師範と山下義韓十段による古式の形
●古式の形　実技（通して）
●始めの動作（礼法）
●表の形14本と裏の形7本をスローモーションなどをまじえて実技の要点を詳しく解説する。
●講習式での古式の形（まとめ）
定価　六、八一二五円（送料別）
（本体価格　六、五〇〇円＋税）
◎お申込みおよびお問い合わせ先
〒112－0003
東京都文京区春日一－一六－三〇
講道館総務部
電話　〇三－三八一一－七一五五

りだったのだが、そのまま稽古を始めることとなってしまった。そしてルーズベルトは、毎日食前に2時間の稽古を欠かさず[18]、ホワイトハウスの中に柔道場を作らせるほどすぐに柔道に夢中になるのであった。

またルーズベルトは、アメリカ海軍兵学校にもこの素晴らしい柔道を導入しようと図り、反対する海軍当局を納得させるために、山下と当時アメリカ最強と謳われたジョージ・グラントというレスラーを衆前で戦わせたこともあった。山下はもう既に40歳目前、自分の2倍もあろうかという大男に勝てる自信があったかは疑問であるが、とにかくここで引いては柔道の、そして日本の名折れ、とにかくグラントに飛びかかっていった。そして体落や横捨身に投げつけ、最後は抑え込んで何とか勝利を収めることができた。この勝利によってアメリカ海軍も柔道を認めざるを得ない状況になり、とうとう海軍兵学校の正課に柔道が採用されるに至ったのである。このころの模様を山下は、

米国には由来拳法（ボキシング）なるものがあります。そこへ持ってきて体格は頗る偉大で、身長5尺8寸（約175㎝）が平均点となっている位ですから、日本人などは傍へ寄れば実にみじめなものです。ソレでもし膂力を比較するということになれば到底相撲になりません。ルーズベルトのごときは身長はさほど高くありませんが、目方が24～5貫（約90～94㎏）もあって腕力もすぐれています。それが私共のような小さな15～6貫（56～60㎏）のものが上に乗れば、動くことが出来ないというのは全く術です。大統領はよく戯れに私を蛇だと言われます。ソレはいくら力をもって押さえても巧みに抜けられて、兎角するとすぐ巻きつけられるという意味です。（略）海軍兵学校の課目中に柔術を加えることは、当初随分反対もあった様でしたが、大統領邸における拳法家との仕合に勝ちを制してから、採用されることになりました。３０００人ばかりの生徒の中から毎日50人ずつ稽古するのですが、日本でするように代稽古をしてくれないのには閉口でしたが、この頃漸く弟子も出来ました。[19]

と述懐している。力だけ重さだけでは勝つことのできない不思議な「柔道」の稽古をルーズベルトは続け、山下を師と仰ぎ、そこには確かな師弟関係が出来上がっていた。

当時は折しも日露戦争まっただ中であったが、それについてこんな逸話がある。明治38（１９０５）年5月、陸戦では3月の奉天会戦に辛くも勝利を収め、残すは海戦のみという状況下、山下がいつものように稽古に行くと、大統領が日本海海戦での日本の劇的な完全勝利を山下に教えてくれたのであった。

大統領が私の耳元に口をあててバンザーイ、バンザーイと云ってくれたのです。私は最初何事かわからなかったのですが、それが日本海海戦の大勝と気づいた時には、思わず大統領の腕にしがみつきました。[20]

と後に山下本人が語っている。そして山下はその場にへたりこんで大泣きしたという。誰もが予想だにしなかった敵の殲滅という大勝利を、山下はすぐに公使館に飛び込んで伝えた。まだ日本側にはこの勝利の情報が一切入っていなかったため、山下のこの活躍はのちに「金鵄勲章」ものだと讃えられたのであった。

このような山下のアメリカでの活躍を、日本にいる嘉納師範は我が事のように嬉しく誇らしく思っていたようである。師範は山下へ次のような手紙を認めている。

御渡米後、数回の御書面、一々拝見、御両人共御勇健、柔道も好評を得、大統領も修行するに至り候由、御骨折の結果と被存、

悦居候、

日露の戦争も連戦連捷、最初考え候より容易く終焉の目的達せられ可申と被思候、旅順閉塞の事業、広瀬・湯浅・本田・大石等の有段者及白石其他の無段者の手にて、遂行せられ、至る処、講道館の面目を施し候次第にて、随て柔道修行上、活気を帯ぶるに至り候、

御地に於ては、兵学校等に柔道を課することに相成、既に委嘱も受られ候由、又当地より教員雇入れの議ありとの事、愈々の場合には適当の者派遣可致、又御申越の大望も現状聞合置可申候、今日は日本の柔道を御地に植付くるには大切の時期に付、十分に御苦心、永遠の基礎を立つる様、御心掛被下度、広瀬・湯浅等の偉業の為、柔道の単に体育上に価値あるのみならず、精神教育として有数のものなりとの、拙者の宿論が世人に認められること、益々多きに至り、随て柔道教員の責任、極めて大に相成候、山下の今日の地位は、其柔道の代表者として、大米国に現れ候次第故、世人の注目するところとなるは勿論の事、又世界柔道の将来に、山下の一挙一動が関係を及ぼすという次第故、品行を慎み、交際に注意し、万時、為る事為す事、将来を考え、左右を思い、思慮周到なるを要し候、其辺、最御苦心を希望いたし候、事柄によっては高平公使の意見を聞き、違算なき様御心掛相成度候、拙者は何とかして山下をして単に柔道の技術上、価値を米国に示すのみならず、柔道により修行したる高尚なる人物として米国に地位を得しめ度、熱心の希望を有し居候間、其辺、寸時もお忘れ被下間敷候、場合によれば、二ヶ月三ヶ月位ならば、自身にも御地に出掛け、加勢いたし度と存居候、尤拙者は御来示の通、教育上、枢要の地位に居り、容易に内地を離れ候事出来不申候え共、若し右等の事、必要と御認めあらば、大統領の希望というような都合から、高平公使を経て、日本政府へ照会あらば、二三ヶ月位は出掛候事不出来にも限らずと存候、兎も角も山下の終世の大事業として十分の成功を希望いたし候、昇段の事は、其内取計度と存居候、教員派遣等の参考の為、可也詳細に現地の現況及それら教員に渡米の後、生活上の模様等、御推察出来候丈御報道被下度候、右御返事まで如此に候、

（明治37年）五月十九日　　嘉納治五郎

山下義韶殿[21]

日本海軍による旅順港閉塞作戦の志願者、また戦死者には広瀬武夫・湯浅竹次郎など、講道館出身者が何人も含まれていた。師範は、立派に役目を果した彼らに感じ入り、そんな彼らの精神を支えたであろう講道館柔道が海外に伝わっていくことを嬉しく思っているようである。そしてその柔道の、日本の代表者としてアメリカで奮闘している山下のことをとても誇りに思い、また柔道の精神教育的な面も正しく伝わるように心を砕いている様子が見て取れる。山下に対して、柔道が強いだけでなく、柔道を通して精神をも修行した高尚な人物であることを期待している。また師範は、山下がそれだけの器を備えていると見ていたのであろう。また、英語も堪能で「教育」に人一倍熱心だった師範は、本当ならば今すぐにでも日本を飛び出して山下とともにアメリカに柔道を根付かせることに力を注ぎたかったのではないであろうか。忙しいのが悔やまれる、そんな気持ちが文面からにじみ出てくるようである。そしてこの手紙にもあるように、このアメリカでの柔道普及の功績が大きいことにより、明治37（１９０４）年10月23日山下はアメリカにいながらにして七

段に昇段することとなった。

約3年アメリカで柔道普及に粉骨砕身した山下は、明治39（1906）年5月、大統領に最後の稽古として活法を伝授して[22]契約終了となった。山下は、彼の「終世の大事業」を成し遂げ、31日の凱旋帰国と相成ったのであった。[23]

講道館初　名誉の十段

帰国後、山下は警視庁柔道世話係に復職、また講道館指南役、高等師範学校や宮内省警察部、早稲田、国士舘などの柔道教師をも歴任していった。明治40（1907）年には大日本武徳会の柔道形制定にも携わる。また大正2（1913）年には、東京市内の町道場の統一を図るため日本士道会を設立し、その会長職に就いている。彼はこの町道場の集まりである士道会をとても大切にしており、晩年まで彼のよく用いる名刺は「大日本士道会会長　山下義韶」名義であった。[24]そして大正9（1920）年3月17日55歳には八段、昭和5（1930）年4月1日65歳には九段と昇段を重ねていったのであった。

よく後進の指導にあたり、また自らの稽古も決して怠らなかった山下ではあるが、昭和7（1932）年8月の夏季講習会のさなかに、急に具合が悪くなり緊急入院することとなってしまった。1週間以上も面会謝絶の日が続き、一時は新聞に「山下九段、遂に逝く」と誤報が掲載されるほど重体であったようである。[25]そこからはどうやら恢復したものの、それ以来稽古衣に袖を通すことはほぼ出来なくなってしまった。

そして、ほぼ柔道の現役からは退いていた昭和9（1934）年11月、講道館の創立五十周年を祝う記念祭が、皇族方や多くの来賓を招いて盛大に執り行われた。山下はここで、講道館十数万の門人総代として嘉納師範に対して礼詞を詠みあげることとなっていた。しかし、既に大きな声を出すことが出来なくなっていたため、宗像逸郎が山下の礼詞を代読することになった。

今より五十数年前と言えば世を挙げて西洋文明の模倣にのみ趨り、柔術の如きは殆ど顧みる人もないという状態でありました。然るに先生は高邁なる識見を以てここに見られる処あり、非凡卓越せる資を以て、夙に青年時代より真面目に研究に従事せられ、講道館柔道を興されてより五十年、（略）吾等門人の斉しく感激に堪えない処であります。[26]

大きな情熱をもって講道館柔道という壮大な体系を創り出した嘉納師範に、また人生を賭して嘉納師範の柔道を体現しようとした山下。宗像の代読のもと、艱難も悦楽も長く共にしてきたこの二人が無言のまま対峙する姿は、多くの者に深い感動を与えた。イギリスで小泉軍治に師事し柔道修行に励んでいたサラ・マイヤーは、当時来日しこの式典にも出席していたが、この二人のことを次のように書いている。

全ての有名な柔道家がそこには居た。中でも最も古い生徒である山下が現れた時にはかなり感動する場面があった。彼は年をとって声を失っており、他の人が彼の演説を読んだ。彼は嘉納師範に向かって立っていた。私は2人について長い間考えずにはいられなかった。嘉納師範は今はとても年をとっているが、かつて柔道を確固たるものにするために戦った。そしてそのような驚くべき偉業を彼らは見たに違いない。（略）ああ、なんという素晴らしい日だったであろうか。[27]

やはりこの場面に、静かだが深い感銘を覚えた様子が窺えよう。この時山下は69歳、師範

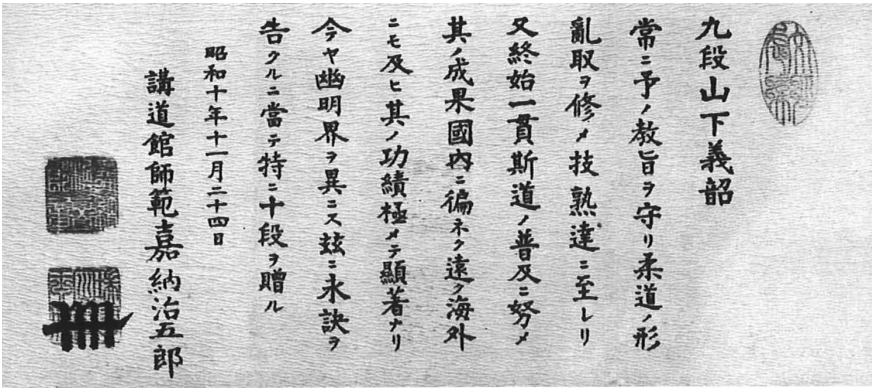

九段山下義韶
常ニ予ノ教旨ヲ守リ柔道ノ形
亂取ヲ修メ技熟達ニ至レリ
又終始一貫斯道ノ普及ニ努メ
其ノ成果國内ニ徧ネク遠ク海外
ニモ及ヒ其ノ功績極メテ顯著ナリ
今ヤ幽明界ヲ異ニス茲ニ永訣ヲ
告クルニ當テ特ニ十段ヲ贈ル
昭和十年十一月二十四日
講道館師範嘉納治五郎

図２　講道館葬の際、山下に贈られた十段への昇段証書（『柔道』第6巻第12号（昭和10年12月））

は74歳。これが、山下が公の場に姿を現した最後となった。

その後、体調を崩し再度入院し重篤の身となった。嘉納師範は、山下のこれまでの大きな功績を認め、ある形式をもって山下に講道館初の十段位を授与することを伝えたのである。[28] 山下の喜びは如何ばかりであったであろうか。師範が具合の悪い自分を励まそうとしてくれている、と感じたかもしれない。また師範も、山下の永年の貢献に十段を贈ることで報い、これを機にまた元気になってほしいと願ったであろう。しかし、そんな願いも空しく、山下は昭和10（1935）年10月26日、帝国大学病院呉内科に於いて亡くなった。享年71であった。

山下は11月24日、特に講道館葬をもって送られた。そしてその場において、正式に十段が山下に追贈されたのであった。

嘉納師範はこの講道館葬に際して、山下への感謝の気持ちを「永訣の辞」として朗読した。

君は予の門下にあること五十余年、其の間終始一貫講道館の事業を助け、以て柔道の発展に貢献したり。（略）君の如き予が特に信頼せる講道館最高段の門下を失ひたるは、予の最も遺憾とする所なり。茲に於て予は君に贈るに左の雄頌を以てせんとす。[29]

そして送られたのが図の十段位であった。

最後に、山下の柔道上達法を紹介したい。

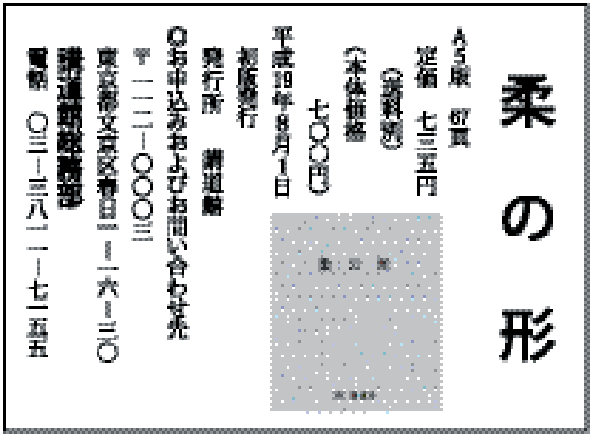
1. 体得の2字にあり。
2. 体得をなすまでには刻苦研精 倦まざること。
3. 体得すれば理のあるところ自然判明す。
4. 体得なさば妙技を知得す。[30]

まさに年1万本の稽古を経て十段にまで登りつめた努力の人、山下義韶らしい訓といえよう。

（図書資料部学芸員）

※引用部分は、現代漢字・仮名づかいにあらためた。

《主要参考文献》
「山下義韶履歴書」
「「努力の人 山下七段」水谷竹紫著『柔道』2巻5号（大正5年5月）」
《その他典拠》

1　慶應元年は1865年4月7日からであり、1885年2月16日は未だ文治元年であるが、山下本人の手による履歴書に「慶應元年」とあるため、その記述を尊重した。

2 「講道館入門者誓文帳」
3 「努力の人 山下七段」 水谷竹紫著『柔道』 2巻5号（大正5年5月）
4 「講道館沿革要史」『柔道』 23巻12号（昭和27年12月）には、今まで上二番町にあった二十畳の道場を品川邸内に移築し、さらに増築して四十畳の道場が出来たことが述べられている。
5 『磯貝一口述 わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部発行 昭和15年 には、「十名づゝの対抗試合が、一名の引分け、九名の勝ちという講道館の圧倒的な勝利となった」とある。
6 「名選手ものがたり55 山下義韶10段」くろだたけし『近代柔道』第6巻第5号（昭和59年5月）
7 『慶應義塾柔道部史』三田柔友会編・発行 昭和8年
8 前掲註7参照 但し福澤翁は表向きは怒っていたが、陰では当時の惰弱な気風の中で、この様な蛮勇があったことを褒めてもいたそうである。
9 前掲註3参照
10 後の十段。
11 前掲註5参照
12 前掲註3参照 山下は、明治21年から1年間、広島県江田島に移転した海軍兵学校にも柔道教授として赴いていた。この事件は、山下が江田島に赴任しているさなか、近くで招魂祭があるというので出掛けていったときに起こったものである。またこの話の後日談があり、実はあの天狗は、江田島にいる講道館柔道の教授だということが後々判明し、皆改めて講道館柔道の強さに驚きを新たにしたということである。
13 『ライオンの夢』神山典士著 小学館 平成9年
14 前掲註7参照
15 前掲註3参照
16 前掲註3によれば、乗馬が好きでホースレディとの異名をもっていたそうである。
17 前掲註3の「努力の人 山下七段」などによると、筆子夫人は講道館に入門こそしていなかったが、山下より柔道や護身術の手ほどきをすでに受けていた。
18 「柔術に就て」（英文和訳）『武徳誌』第1巻第3号（明治39年8月）より。前掲註3の「努力の人 山下七段」では隔日の稽古であったと記されているが、2年に亘る稽古中には毎日の時期もあれば隔日の時期もあったであろうことは想像に難くない。
19 「柔術に就て」（英文和訳）『武徳誌』第1巻第3号（明治39年8月）
20 前掲註3参照
21 『嘉納先生傳』横山健堂著 昭和16年
22 「ある日本人コスモポリタンの物語」（原文英語）本田増次郎 の中で明治39年5月3日の項に記されている。
23 「雑報」『嘉納塾同窓会雑誌』第26号 嘉納塾（明治39年11月）
24 「山下先生断想録」田中勇著 『柔道』（昭和10年12月）
25 前掲註24参照
26 「講道館創立五十年記念祭の記」『柔道』（昭和10年1月）
27 サラ・マイヤーから小泉軍治への手紙（1934年11月27日）（邦訳・高橋） http://www.judo info.com/mayer.htm
28 「山下指南逝く」『柔道』（昭和10年11月）
29 「永訣の辞」嘉納治五郎 『柔道』（昭和10年12月）
30 「柔道上達の秘訣を一口に云へば」『柔道』第2巻第8号（大正5年8月）